

あふ
aff

agriculture forestry fisheries

2019

7

JULY

画像提供／PIXTA

特集1

自然と暮らすという



特集
2

農業のめぐみ

農林水産省

目次

- 02 **連載** 私を支えた「食」
佐藤あり紗さん (バレーボール元日本代表)

特集1

自然と暮らそう

- 05 移住のすすめ
07 生き物への興味から酪農の道へ(北海道)
11 大自然の中で公私ともに充実した田園生活(岩手)
15 清流の地で旬にこだわった野菜作りを(群馬)
19 転勤がきっかけで農業へ転身(新潟)
22 有機農業での独立を目指して(三重)
25 「田舎で暮らそう」というひと言で(徳島)
28 大好きな釣りを仕事にするために(大分)
32 まずは体験からはじめてみよう

特集2

農業のめぐみ

- 36 田畑は作物をつくるだけじゃない
40 生き物を育む田畑のめぐみ

- 43 **連載** ギネス世界記録™ 挑戦者たち vol.2
世界最大の田んぼアート

- 46 **読者の声**
読者の声(19年4月号分)

「aff」の
Webサイトは
こちら ▶▶▶▶▶



本誌に掲載した論文などで、
意見にわたる部分は、それぞれの筆者の
個人的見解であることをお断りします。



私を支えた「食」

佐藤あり紗さん(バレーボール元日本代表)



東京2020オリンピック・パラリンピック大会開催に向け、
トップアスリートなどの地元食材を生かした思い出深い「和食」を紹介します。



写真提供／月刊バレーボール

母の手料理「おくずかけ」が 私のパワーフード

小2からバレーボールを始め、大学を卒業して茨城の実業団チームに入るまで地元、仙台で過ごしました。幼いころから、母がアスリートとしての食生活を意識してくれていて、栄養価の高いものを中心とした食事をとっていました。

中でも大好きなのは、母が作る「おくずかけ」。野菜をたっぷり入れ、白石温麺(うーめん)という地域特有の麺をだしじょうゆで煮込み、とろみをつけた料理です。薬味には、「仙台せり」を入れたりします。各家庭によって味も異なるんですよ。



宮城県仙台市出身。ポジションは守備を専門とするリベロ。古川学園高等学校、東北福祉大学を経て日立リヴァーレに所属。2013年、全日本女子メンバーに選出される。同年11月、ワールドグランドチャンピオンズカップではベストリベロ賞に輝き、銅メダル獲得に貢献。2016年、リオデジャネイロオリンピックの正リベロとして出場。2018年からリヴァーレ仙台に加入し、プロバレーボールプレーヤーとして活躍中。

口当たりがさっぱりしていて、白米ともよく合うので、母によくリクエストしていましたね。

社会人になり、地元を離れてからは、母が「おくずかけ」をタッパーに入れて送ってくれました。地元の料理を食べると自然とテンションが上がるので、厳しい練習や次の試合もがんばろうと思えました。私の大きな支えになったと思います。

他にも牛タン、麦飯も大好き。麦飯は白米よりも栄養価が高いとされているので、今もよく食べます。

試合で海外に行くと、やっぱり「和食」の良さを実感します。私自身、食事の影響がダイレクトに体に出るタイプみたいで、脂身の多い肉中心の食事をとると、朝目覚めたときに「体が重いな」と感じるがありました。その日のパフォーマンスに影響が出てしまうこともあるので、食事はできるだけいいものを取り入れたいと常に考えています。

2018年から仙台に戻り、現在リガーレ仙台でプレーしています。仙台は野球、サッカーなど地域を挙げてのスポーツ振興が盛ん。私もプロとしてバレーボールを通じてスポーツの楽しさや地元の魅力を伝えていきたいと思っています。



宮城県仙南地方の郷土料理「おくずかけ」。じゃがいも、にんじん、ごぼう、里芋などの野菜と、焼き豆腐や油揚げ、こんにゃくなどを煮込んだ料理。



▶ 農林水産省公式キッチン



多年草のせりは、ほぼ周年で生産されている。宮城県名取市の名産「仙台せり」は、茎や根っこの太さが特徴で、葉・茎・根っことそれぞれ違う味と食感が楽しめる。

粘り強い日本女子 バレーボールのラリーに注目

女子バレーボールが世界と闘うとき、どうしても身長やパワーなどフィジカル面での差があります。でも、日本のバレーボールには相手の身長の高さを利用した器用なプレーや粘り強さがあるのです。攻撃・守備が一体となったチームプレーでつないでいくラリーも見どころかもしれません。素晴らしい試合が期待できると思いますよ。

男子バレーボールの場合は、何といてもその力強いプレーが魅力。サーブやアタック1本でズバツと決まるのも見ていて爽快ですね。リオ五輪で悔しい結果となった分、東京2020に懸ける思いは並々ならぬものがあると思います。パワーアップした日本男子チームの活躍も楽しみです。



2018年に発足したリガーレ仙台でキャプテンとして活躍中。



バレーボールのルールとメダルへの道

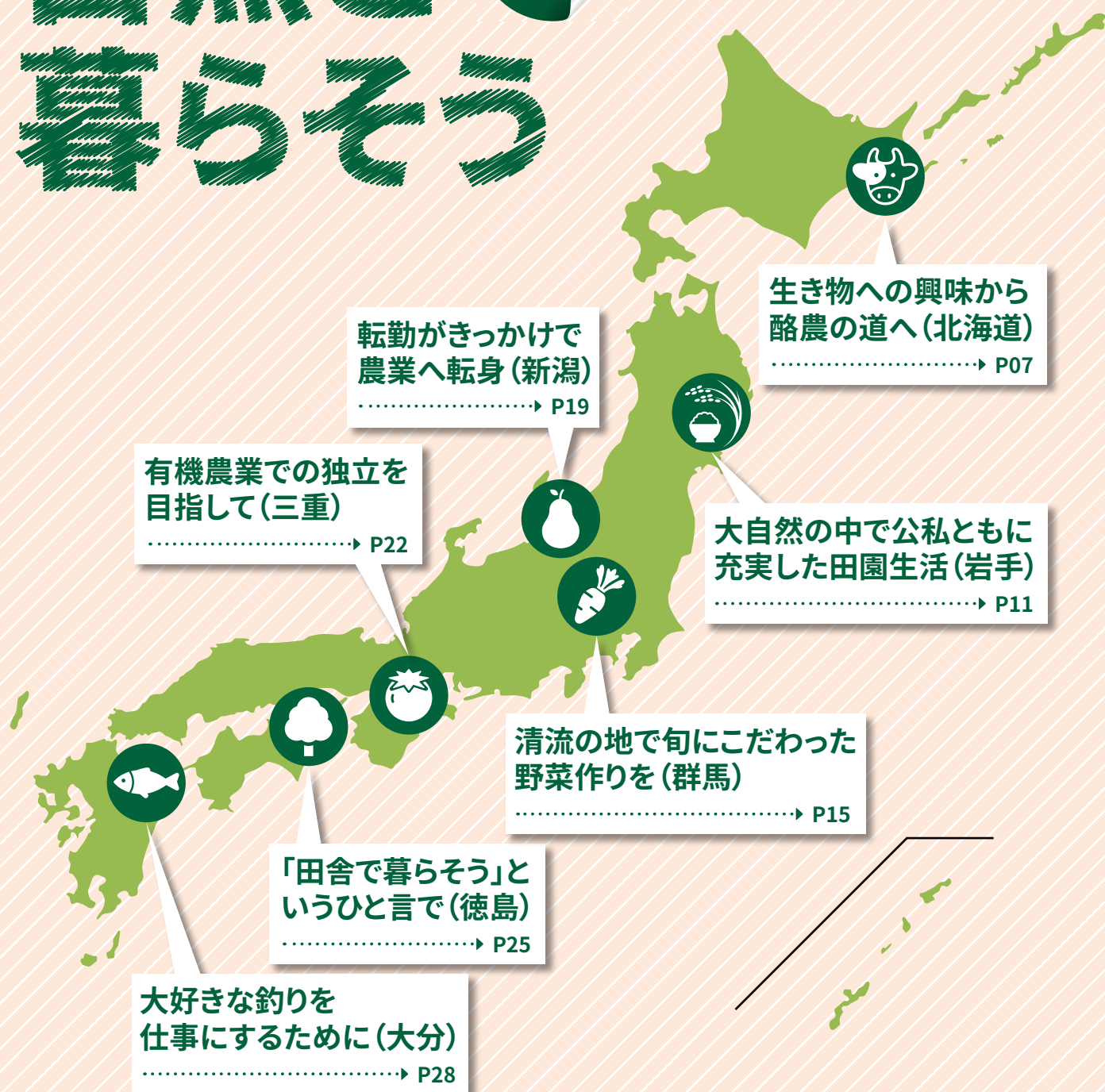
東京2020オリンピックのバレーボール競技のメイン会場は、1万5,000人の収容が可能な有明アリーナ。試合期間は2020年7月25日から8月9日（2019年4月19日現在）。

バレーボールは前衛・後衛各3人、計6人で競技を行う。ラリーに勝ったチームが1点を獲得し、同時にサーブ権を得る。25点を先取したチームがセットを取る5セットマッチ。3セッ

ト先制したほうが勝ちとなるが、セットカウントが2対2になった場合の最終セットは、15点を先制したチームが勝利する。守備を担うリベロはレシーブに特化した選手で、コートへの出入りが自由。ひとり異なる色のユニフォームを着用している。どの後衛の選手とも無制限で交代できるが、サーブを打ったり、ネットより高いボールをスパイクしたりすることはできない。

自然と暮らそう

特集
1



移住のすすめ

最近、地方移住への関心が高まっています。

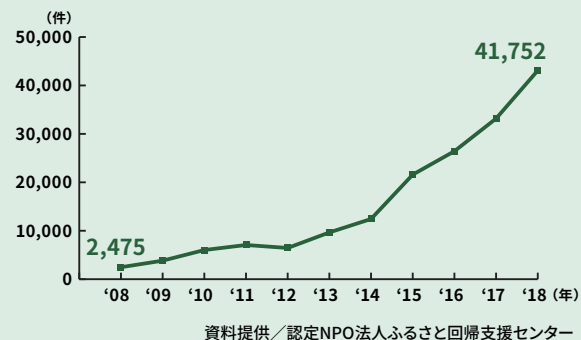
そこで、移住へのきっかけや生活の様子はどうなのか、移住した方の話を中心に紹介します。

地方移住に興味がある若者が増加

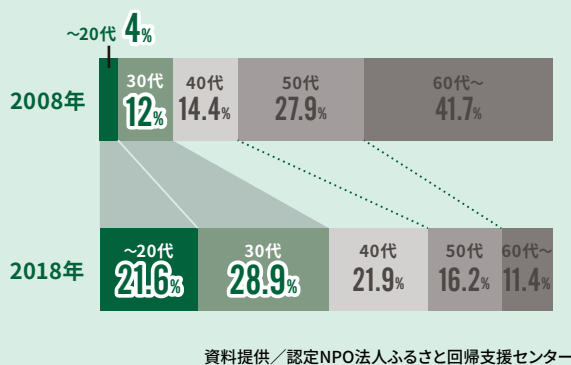
働く場や充実した住環境を求め、若年層を中心に都市部へ人口が流出し、地方の農山漁村の活力が失われつつありました。しかし、ここ数年、若い世代を中心に地方移住への関心が高まっています。

地方移住を支援する認定NPO法人ふるさと回帰支援センター（東京都千代田区）によると、同センターへの相談件数はこの10年で約17倍。2018年は4万件を超えました。中でも、30代以下の相談が多くなっており、10年前には16パーセントだった30代以下の割合が、2018年には50パーセントを超えています。このように、若い世代からの相談が増えることで、幅広い世代が関心を寄せるようになっていきます。

移住相談件数の推移



相談件数の年代別割合

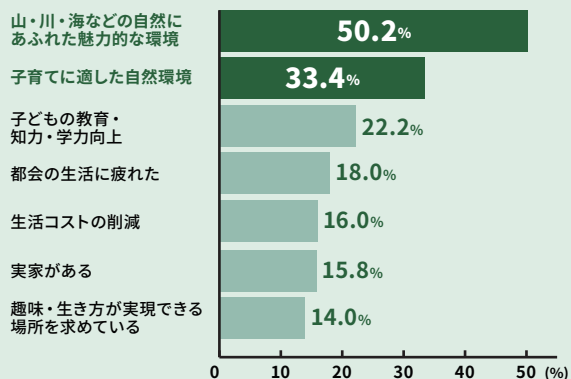


移住への興味は自然環境

若い世代が地方への移住に興味をもつ理由としては、自然環境の良さが多いようです。（一社）移住・交流推進機構が、20代から30代の既婚男女に調査したところ、「山・川・海などの自然にあふれた魅力的な環境」という答えが、5割を超えて圧倒的でした。また、将来的な子育て環境としても魅力を感じている人も多いようです。とはいえ、いきなり地方移住を決断するのは難しいでしょう。移住した先での人間関係や仕事について、不安を感じる人も多いかもしれません。

次のページから移住した方の話を紹介します。参考にしてみたいかがでしょうか。

移住に興味がある理由



生き物への興味から酪農の道へ

渡邊剛さん(43歳)・北海道浜中町



酪農家。石川県金沢市生まれ。弘前大学農学部(現在の農学生命科学部)を卒業後、複数の職業を経て、2007年に浜中町に移住。研修を受けた後、2011年に酪農経営をスタート。

浜中町には研修牧場があった

幼いころから生き物に興味があり、弘前大学で家畜の繁殖を学んだ渡邊剛さん。卒業後、地元に戻りプログラマーや保険の外交員として働く中、やはり生き物に関わる仕事に就きたい思いが強まり、インターネットで北海道農業担い手育成センターの存在を知り、名古屋で開催された就農相談会に参加しました。

「大規模な酪農を行える北海道で移住先の候補地としていくつかの市町を見学しました。浜中町に決めた理由は、就農前に雇用形態で技術などを学べる研修牧場があったことです」

浜中町は約6,000の人口に対して3倍以上の乳牛がいるほど酪農が盛んです。高級アイスクリームの原料として選ばれるなど牛乳の品質にも定評があります。「自然環境は素晴らしくて、牧場の見学のため車で回ったとき、タンチョウヅルやキタキツネ、エゾシカを見かけて感動しました」



町の南側には、風光明媚な霧多布(きりたつぷ)岬がある。

学生時代に知り合い、結婚した北海道士別市出身の季子(ときこ)さんとともに、2007年に浜中町へ移住。当初は社宅に住み、給与をもらいながら、研修牧場で約4年間、牛の飼育や牧草地の管理の方法などを学びました。



(有) 浜中町就農者研修牧場は、浜中町と浜中町農業協同組合により設立された、新規就農者を養成するためのトレーニング施設。

町のサポートのもと酪農家へ

牧場を手に入れ、念願の酪農の経営をスタートしたのが2011年です。このとき、リース事業を利用しました。この仕組みは、北海道農業開発公社(現在の北海道農業公社)が離農する農家から施設や農地を買い取り、新規就農者に一定期間リースした後、売却するものです。また、浜中町にはリース料の半額を5年間助成してくれる制度があり、これも利用しました。他にも5年間、固定資産税に当たる額が助成されました。

最初に飼ったのはホルスタイン種58頭でした。次第に規模を拡大し、牧場は90ヘクタールに達し、ここで子牛を含め110頭を飼育しています。

牛の飼い方には牛舎でのつなぎ飼いと放牧があります。渡邊さんは放牧をメインにしており、特に、夏場は昼夜とも放牧します。「自由に動けるようにしてやるとストレスがかからないようです」と渡邊さん。エサに関しても牧草地に牧草のロールを置いてあります。これは青い牧草と乾いたロールのうち、好きなほうを食べられるようにするためです。



リース事業を介して高齢のため離農した生産者の施設を引き継いだ。



「新規参入に当たっては役場やJAなど町の皆さんが親身に対応してくれました」と語る渡邊さんと奥さんの季子さん。

私生活も大切にしつつ 牧場の拡大を図る

力を使う仕事なので自分自身の体調管理も大事です。必ず餌をやらなければなりません。搾乳も毎日行います。「それでも、やったらやった分、牛は全部、返してくれるのでやりがいがあります」

酪農は休みがなく体がきつい仕事というイメージがありますが、酪農ヘルパー制度などを利用して休暇を取ることで労力の軽減を図れるようになっていきます。「私の場合は個人でヘルパーをされている方に月2回くらいお願いしています。妻と3人の子供と10日間、沖縄旅行に行ったこともあります」

できるだけ自由な時間を持てるように心がけ、道内観光をしたり、趣味の陶芸に打ち込んだり、新天地での生活を楽しんでいるそうです。「浜中町は移住支援に力を入れていることもあり、41組が新規に酪農を始めていますが、この人たちとの交流もあります」

「飼育頭数をさらに増やし、将来的には肉牛も手がけてみたい」と言う渡邊さんは「やりたかったことを現実化した喜びはかけがえのないものです」と言います。



2年前に完成したご自宅。夜はブラネタリウムのような満天の星を楽しめる。



子牛にミルクを与える季子さん。「酪農は毎日の仕事にバリエーションがあって楽しい」と言う。

私のピカイチ



自宅に趣味の部屋を作り、電動ロクロを設置しました。陶芸や家具作りなどをしています。

どんな移住支援があるの？

浜中町就農者研修牧場

新規就農者を養成するためのトレーニング施設です。雇用形態で約3年間、実践的な研修を受けられ、哺育舎、分娩舎、乾乳舎、搾乳舎などの施設と研修生のための社宅があります。方針は「酪農の基礎から実践的技術・知識まで」。酪農経営に必要な基礎知識、営農技術、計数管理などを習得できます。



▶ 浜中町就農者研修牧場

大自然の中で公私ともに充実した田園生活

三宅博都さん(42歳)・岩手県雫石町



株式会社みのり片子沢(かたこざわ)専務。岡山県井原市生まれ。福岡大学で化学を専攻し、北海道大学で博士号を取得する。製造業の海外技術営業と開発を経験した後、2016年に雫石町に移住し、就農。

きっかけは東京駅で見かけた 移住体験ツアー

電子部品を製造するメーカーで基礎研究から開発、技術営業まで経験した三宅博都さんはIT産業の世界的な中心地であるアメリカのシリコンバレーでも4年間、駐在員として働いたことがあるといいます。

「巨大化しつつあるIT企業を顧客とする刺激的な仕事ではありましたが、時差のある中、日本の本社とひんぱんに連絡を取らなければならず、昼も夜もないような日々でした」

帰国後、小さな家庭菜園で過ごす休日で息抜きしつつ、大きな組織の一員として働くうち、本格的に農業に取り組んでみたい、という思いが強くなります。

そんなとき、たまたま通りかかった東京駅で雫石町への移住体験ツアーのブースを見かけ、参加しようと即座に決めました。



雫石町は日本百名山の1つ、標高2,038メートルの岩手山のふもとに位置する。

初めて訪れた快晴の雫石町で待っていたのは雪をいただく岩手山(いわてさん)の雄大な景観。自然の素晴らしさに魅了された三宅さんは、真剣に移住を考えるようになりました。何回か通い、町役場で相談するうち、雫石町の「地域おこし協力隊」に採用され、2016年9月に家族4人で移住します。当初、農業振興指導センターに所属して、6次産業関連の業務などに関わるようになりました。



樹々に囲まれた三宅さんのご自宅。

心行くまで家庭菜園を楽しむ

三宅さんが住まいにしたのは、「岩手県雫石町南畑コテージむら」という広々とした農地の付いた分譲地の空き家でした。

「家の目の前にある広い庭で好きな家庭菜園を心行くまで楽しめるので、ここでの暮らしにとっても満足しています。私の妻は中国人で、田舎で育ったのですが、自然豊かな環境が合っているようです」

コテージむらは、パイロットやビジネスマンなど世界で活躍されていた移住者が多いといいます。「広い敷地を利用して野菜を作ったり、羊を飼ったり、古民家を移築したり、それぞれのライフスタイルを楽しんでいます」



家庭菜園では、さまざまな野菜を栽培している。

新技術を導入する 農業生産法人で活躍

三宅さんはより本格的に農業に取り組むため、2018年4月に、地元の農業生産法人の株式会社みのり片子沢に入社しました。

岩手県オリジナル水稻品種「銀河のしずく」や、そば、ミニトマトなどを生産する同社は、トヨタ自動車の生産方式「カイゼン」にならって作業の生産性と安全性の向上を図っています。2018年には、ドローンや食味センサー付きコンバインなど新たな技術を積極的に導入するなどの取り組みが評価され、「全国農業担い手サミット」で全国担い手育成総合支援協議会会長賞を受賞しました。



効率化を図りながら栽培面積を拡大しているみのり片子沢の皆さん。現在の耕作面積は70ヘクタールを超える。

能力を買われ、同社の専務として迎えられ、さまざまな事業に取り組む三宅さん。農作業の即戦力としても期待されており、入社早々、トラクターを運転するため大型特殊免許を取得しています。



岩手山を望む水田で田植え機を運転する。1年前に大型特殊免許を取得したばかり。

地域社会を動かす 大きな歯車になれる

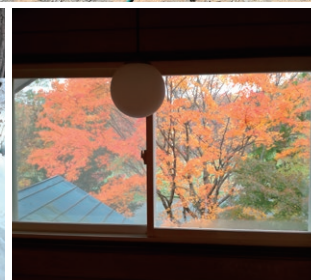
「地元の人たちにも温かく迎え入れていただき、年齢に関係なく仲良くしてもらっています」と言う三宅さん。辺り一面が銀世界になる冬季は、町道の除雪の作業を請け負い、あるいはお年寄りの困りごとを助けるなど、高齢化の進む地区で何かと頼りにされる存在になっています。

また、農作物の鳥獣被害に問題意識を持った三宅さんは、自ら狩猟免許を取得して、雫石町の町鳥獣被害対策実施隊の隊員となりました。さらに地元の名人の打ったそばに感動したことをきっかけに「岩手山そば打ち愛好会」を立ち上げ、代表として腕を磨くほか、写真撮影、天体観測、味噌づくりといろいろな趣味を楽しんでいます。

多忙ながらも充実した日々を過ごす三宅さんは、雫石町での暮らしについて、「その気になって探せば、地域のためにできることがいろいろ見つかります。若手がひとり入れば、地域を動かす大きな歯車になれるのが農村での生活のおもしろさです」と笑顔を見せます。



今やそば教室を開き、近所の人たちに教えるほどの腕前に。



大学時代に写真部に所属していた三宅さんは家族や雫石町の風景の撮影を楽しんでいる。

私のピカイチ



移住を決断したときに
眺めたのが、
この雫石の雄大な景観です

どんな移住支援があるの？

岩手県雫石町南畑コテージむら

岩手県農業公社が宅地と農地をセットで分譲している「岩手県雫石町南畑コテージむら」は総面積63ヘクタール。購入して就農する場合、土壌改良などのため営農資金が販売価格の最大10パーセント支援されます。2017年に農林水産省は次世代を担う農業後継者が自信と誇りを持って住み続けられる「農家住宅推進に取り組むモデル地区」として全国6カ所を選定しましたが、その1つでもあります。



▶ 岩手県雫石町南畑コテージむら

清流の地で旬にこだわった野菜作りを

櫻井細香(さやか)さん(47歳)・群馬県桐生市



野菜の栽培、直販を行う。東京都中野区出身。日本体育大学を卒業後、長野県での福祉関係の仕事を経て、農業に取り組むため、2011年に桐生市に移住する。

自分で作った野菜を 食べる感覚が新鮮だった

東京育ちの櫻井細香さんは、大学を出た後、長野県の福祉施設で働き、障害者とともに農作業に取り組むことになりました。そのとき、採れたての野菜の味に感動し、農業という仕事に新鮮さを感じたといいます。

「体を使って働き、自分で作ったものを自分で食べる。しかも作ったものを人の手に届けば、おいしさという喜びが生まれる。たんに稼ぐだけの仕事ではない、と興味を持ったんです」

福祉施設の同僚だった大輔さんと結婚し、夫の実家のある群馬県桐生市に転居。そこで小さな家庭菜園を借りていましたが、より広い農地で旬にこだわった有機農業を行いたい、という夫婦の気持ちが一致し、桐生市役所に相談に行きます。「担当者が親切な方で、個人的な紹介のようなかたちで役場を退職された地主さんを紹介してくれました」



渡良瀬川に近い畑で夫の大輔さん(48歳)と。

地主さんから2005年に桐生市と合併した黒保根村(当時)の農地を借りられることになり、自宅用の土地も見つかりました。清らかな溪流があり、緑に包まれた山あいに移り住んだのが2011年です。



林の中に開かれた敷地に無垢の材木で建てた自宅。

畑から旬の野菜を直送

健康な土で元気な野菜を育てたい、と土作りにこだわる櫻井さん。落ち葉や米ぬかなどで堆肥を作り、露地ものの野菜を中心に年間50種類以上の作物を育てています。

収穫のない3月から4月は食品加工の作業にあてて、切り干しにんじんや切り干し大根、ジュース、ジャム、梅干し、味噌、たくあんなどを手作りしています。

野菜や加工食品の販売も自分たちで行うことにしました。月に2回、個人やお店など100人くらいの顧客に採れた野菜の情報をメールで送信し、注文があれば配達します。

「お届けしたとき、直接お話ができるので、家族構成や食の好みが変わるようになり、畑で働いているときも、お客様の喜ぶ顔が思い浮かんで励みになります」



評判が良いにんじん。ジュースやジャムの原料にもなる。



山中の自宅に光ファイバー回線を敷いて、顧客にメールを送信し、注文に応じている。

個別の注文に応じる他、旬の野菜を7種から10種、箱に詰めた「おませかセット」も用意しています。「子育て中のママさんにも気軽に利用していただけるよう、スーパーと同じような値段にしています」



梅干し、味噌、たくあん、漬物、切り干しにんじん、切り干し大根などの加工品も販売。

自分たちに向けた小さな農業を

移住して3年後、野菜を育てることや食べることを楽しんでもらえる場、出会いや楽しさを共有できる場を作りたい、という思いから、「和(なごみ)や」を立ち上げました。人と自然が穏やかに調和することを表現したネーミングです。

櫻井さんは、野菜ソリムエの資格を取り、野菜のおいしい食べ方を知ってもらいたい、と公民館などで料理教室を開いている他、群馬県の「農村生活アドバイザー制度」や地元の女性農業者のグループの活動にも参加しています。「食への興味から人のつながりができ、自然いろいろな仕事をするようになりました」

プライベートも充実しているといいます。「私たちの住む地区はもともとの住民より移住者のほうが多くなっていて、燻製を作って販売したり、キャンプ場を経営したりされています。カヌーやクライミングを趣味にしている人から教えてもらうこともあります」

豊かな自然環境での農業の魅力を「経済的な尺度ではなく、豊かな生活をできる」と表現する櫻井さん。今後について「収穫量を増やすのではなく、野菜の質を上げ、生産を安定させて、自分たちに向けた小さな農業をきちんとしたかたちにしていきたいですね」と語ります。



子どものための料理体験教室。子育て中のママのために野菜のレシピを紹介することもある。



桐生市後援の「お米の学校」という年4回のイベントに「市民先生」として参加。子どもたちに田植えを体験してもらった。

私のピカイチ



黒保根町は赤城山の
表流水を水道としていて、
おいしい米や
野菜ができます。

どんな移住支援があるの？

新規就農者に補助金

桐生市では、条件をクリアした50歳未満の認定新規就農者に、経営が軌道に乗るまで最長5年間、毎年最大で150万円の補助金を交付する「農業次世代人材投資事業」の制度があります。

また、定住促進策として、「空き家・空き家バンク」や「お試し暮らし住宅」、空き家のリフォーム補助(最大100万円)、住宅の新築・購入補助(最大200万円)なども行っています。

さらに黒保根町の場合、一定の条件を満たし10年以上定住すると、定住奨励金として結婚祝金(5万円)、出産祝金(5万から15万円)、新築等祝金(増改築含む)(10万または15万円)が支給される制度や、移住者向けの「定住促進住宅」もあります。



▶ 桐生市 定住応援策

転勤がきっかけで農業へ転身

窪田友弘さん(38歳)・新潟県新潟市



窪田梨果園サブマネージャー。沖縄県南城市生まれ。沖縄県内で就職した後、医薬品メーカーに転職し、福岡県で勤務。転勤により2010年から新潟県上越市へ。2014年新潟市出身の奥さんと結婚を機に、農業の道に。

妻の実家で農業の楽しさを実感

新潟県新潟市江南区の茅野山地区は、江戸時代から続く、県内でも指折りのなしの産地です。同地区の窪田梨果園で働く窪田友弘さんは沖縄県出身。同地区へ移り住むこととなったのは、勤めていた会社の転勤がきっかけでした。

「2010年に転勤で新潟県上越市に住んでいたとき、のちに結婚する彼女と知り合いました。1年ほど付き合った後、埼玉県へ転勤しなければならなくなったのです。彼女と一緒に過ごしたいという気持ちが強かったので、この会社を退職することにしました」

窪田さんは、彼女の実家がある新潟市へ転居し、新しい会社へ就職。営業の仕事をしてながら、休日には彼女の実家の手伝いも始めました。この実家が、窪田梨果園です。



ご両親、次期後継者の小熊穂高さんとともに農業に励む日々。

「彼女の両親に軽い感じで『手伝って』と言われて、農業を楽しんでいました。その一方、会社勤めのほうはなかなか大変で、営業活動がうまくいかず、円形脱毛症になってしましまして……」

営業で苦労している窪田さんに、彼女の両親から「ちゃんと農業をやってみないか？」と声が掛かります。

「彼女は3人姉妹の長女で、実家の跡取りが必要ということもあり、婿入りを決めました。これを機に会社を退職。親元就農という形で、窪田梨果園に入ったんです」

土作りにこだわった栽培法で育てられる同園のなしは、ホテルなどの料理人からも評価される高級品。また同園では、お米や野菜も栽培しています。



窪田梨果園では、なしを20数品種栽培。その他にも、米を3品種、枝豆やとうもろこしなど80種から100種ほどの野菜も栽培している。



洋なしの一種「ルレクチェ」は、同園の主力栽培品種。収穫後は約1カ月、温度と湿度を調整した冷蔵庫内で熟させる。柔らかく甘くなり、豊潤な香りも生まれる。

地元の活動やスノーボードも楽しみ

窪田梨果園での生活が始まってから、地区の人々とも積極的に交流。地区の20代から40代の若手が集まる果樹青年部にも所属しています。

「義父が『うちのお婿さん、沖縄出身なんだよ』と、気さくに紹介してくれるので、地域の方とはすぐに知り合いになれました。中には『来月沖縄に行く』と、話をしに来てくださる方もいます。」

青年部での活動はスーパーでの試食販売や、県外イベントでのなし販売などです。また、昨年から新たな試みとして『雪室(ゆきむろ)なし』も実験的に始めています。「雪室」とは、雪を保存しておく倉庫のこと。この倉庫に前年10月から11月に収穫したなしを保存し、5月の連休に販売するのが雪室なしです。



窪田さんが手掛けているコシヒカリはインターネットでも販売。パッケージも自らデザインしている。

この他、昨年は市の施設でパーティ「よんでるないと」も開催。解禁日のある「ル レクチェ」の解禁に合わせたイベントです。『よんでる』とは新潟の方言で、『熟れている、熟している』という意味です。茅野山地区で育てている『ル レクチェ』をもっと多くの方に知ってもらいたいという思いから、このイベントを企画しました」

プライベートでは、日本海で趣味のサーフィンを楽しんでいる他、新たにスノーボードも始めたそうです。

「日本海のサーファーには農業で生計を立てている方も多く、波乗りを楽しみながら、お互いに情報交換をしています。また、3年ほど前からスノーボードも始めました。今では地区の青年部内にスノボ部もできて、皆で近隣のスキー場に出掛けています」

地域にも溶け込んで、農業もプライベートも充実した日々を過ごす窪田さん。転勤や結婚がきっかけにはなりましたが、移住に当たっては、仕事や住環境などをきちんと考え、できる限りの体験を試みたといいます。

「これから移住を考えている方は、できる限り時間をかけてその地域のことをリサーチして、1週間でも1カ月でも、試しに住んでみるのがいいと思います。いきなり引っ越しして『やっぱり合わない』ではリスクが大きいです。慎重に考えて、準備をすることが大事だと思います」



果樹青年部「AGNET NIIGATA」が行った「よんでるないと」。ジャズライブや、ル レクチェを使ったコース料理など、さまざまな企画で盛り上がった。

私のピカイチ



新潟に来て
スノーボードに
はまっています。

どんな移住支援があるの？

引越しや住宅取得支援

新潟市では、「移住モデル地区定住促進住宅支援事業」を実施しています。現在「移住モデル地区」に指定されているのは、越前浜地区(西蒲区内)と小須戸地区(秋葉区内)です。

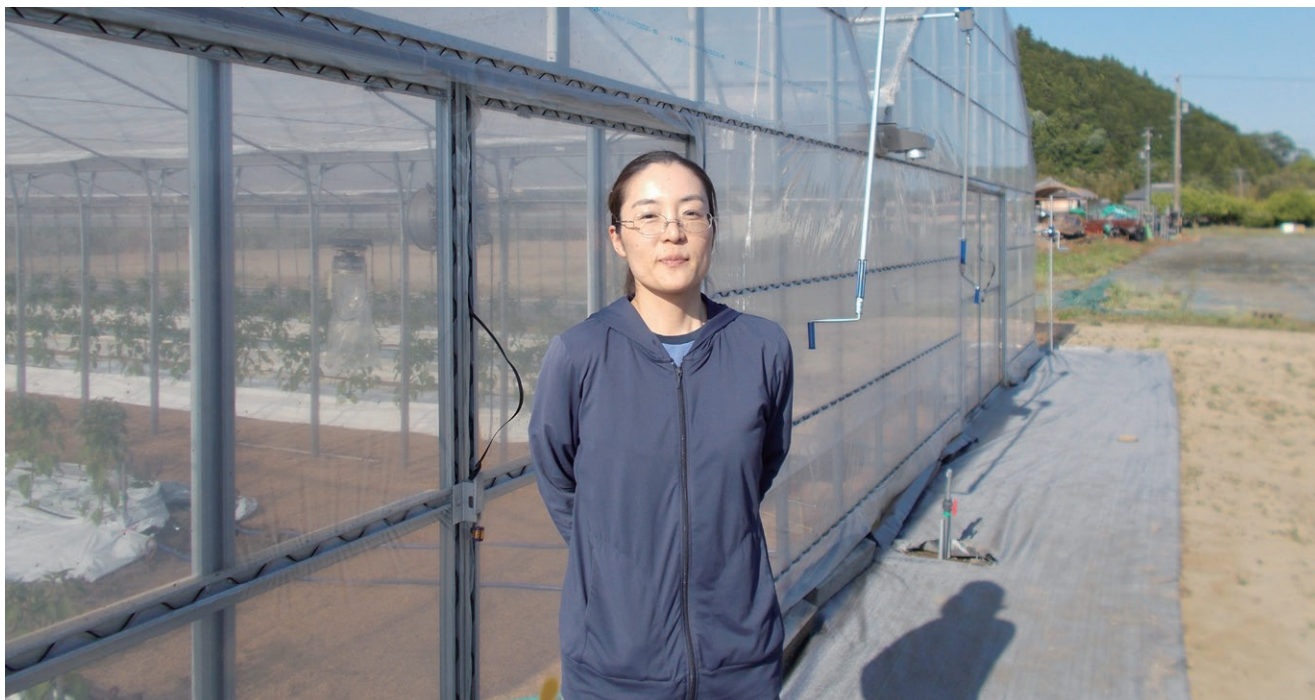
転居費用支援(一般世帯上限10万円、子育て世代は上限15万円)や住宅取得支援(一律30万円)、賃貸した住宅に居住した世帯に実質月額家賃の2分の1以内の額を助成する家賃支援(1カ月当たり上限1万2,000円、最長2年間)などが受けられます。



▶ 新潟市 移住モデル地区定住促進住宅支援事業

有機農業での独立を目指して

鯨岡 恵さん(37歳)・三重県名張市



鯨岡農園代表。福島県いわき市生まれ。大学の農学部を卒業後、福島県の農業法人に入社。2011年8月から研修のため名張市へ移住。2013年4月に独立。

東日本大震災がきっかけで移住

三重県伊賀地方に位置し、ぶどうやお米などが特産品の名張市には、新規就農者が多く、福島県出身の鯨岡恵さんもそのひとりです。鯨岡さんは、名古屋にある大学で学んでいるときに、有機農業を志すようになりました。卒業後は福島県に戻り、研修を経て、地元いわき市の農業法人に入社。念願の有機農業で作物を育てる、農業人生をスタートさせました。

同法人での仕事を続けながら、いわき市内での独立就農を準備。しかし、適した土地を探しているときに、東日本大震災に見舞われます。

「働いていた法人所有の田畑が、福島第一原子力発電所の30キロメートル圏内でした。それで出荷停止となり、法人が解散してしまいます。いわき市内での独立就農もいったんあきらめるしかありませんでした」



師匠の福廣さんは、心強い味方。福廣農園では現在もたくさんの研修生が学んでいる。

弟が住んでいる東京へ一時避難した鯨岡さんは、避難中も農業に携わりたいと考え、池袋で行われていた新・農業人フェアに参加しました。

「大学時代の友人がいる愛知や静岡、三重を中心にブースを回ってみました。そこで紹介されたのが、有機農業では難しいとされていた、ハウスでの大玉トマト栽培を行っている三重県名張市の福廣農園さんです。かつて自分も研修先で、有機農業でミニトマトを栽培していた経験から、その難しさがよく分かっていたので、一度見学してみたいと思いました」

名張市を訪れたのは、ちょうどトマトの栽培時期。実際にトマトを育てているハウスを見て、「ここで学んでみたい」という意欲が湧いてきたそうです。

「雑草もなく、すごくきれいな畑を見て、有機農業での大玉トマトの作り方を学べると思い、福廣農園での研修を志願しました」

同農園に快く受け入れてもらった鯨岡さん。研修開始当初は、将来いわき市に戻ることも考えていましたが、徐々に名張市に腰を据えたいとも思い始めます。

「そんなときに、土地を貸してくれるという話がありました。運良く師匠である福廣さんの畑の近くの土地で、すぐに借りることを決めました」

これを機に独立した鯨岡さんは、三重県の新規就農者向けの補助金でハウスなど必要な設備を整え、大玉トマトを中心にさまざまな有機野菜を育てる生活を始めます。

地域での交流や趣味も満喫

現在は、福廣さんが代表になっている「ゆうき伊賀の里」という出荷グループに入り、宅配業者さんとの契約栽培という形で作物を出荷しています。

「出荷グループに入れたことで、ひとりで農業をしている私も安心して暮らすことができます。縁の少ない土地での新規就農を考えている方は、こうしたネットワークのある研修先を探したほうがいいと思います。見知らぬ土地で何から何までひとりでやるのは、思ったよりも大変ですから」



ハウス7棟、畑約70アールを鯨岡さんひとりで管理。春は、こまつなやほうれんそう、ちんげんさい、夏は大玉トマト、冬は、みずなやしゅんぎくを収穫。パプリカは夏から12月上旬が収穫期。



大玉トマトの収穫期は6月中旬から8月上旬。農薬を使わない有機農業では、ハウス内に虫を入れないようにすることが鉄則。



トマトと同じく有機農業では難しいとされているパプリカも栽培。

暮らしの面でも福廣さんにお世話になっていて、ご家族や同農園で働くパートさんたちから、名張市の風習や料理などを教えてもらっているそうです。

「例えば、お正月には福廣さん宅でもちつきをするのですが、鏡もちやお雑煮の作り方が福島と違っていておもしろいです。名張のこともいろいろと教えてくれて、とても勉強になります」

また、名張市をはじめとする伊賀地方では、有機農業に取り組んでいる新規就農者の交流も盛んに行われています。鯨岡さんも農業女子で集まって話をしたり、同年代のグループでカラオケへ行ったりなどの交流を楽しんでいるとか。

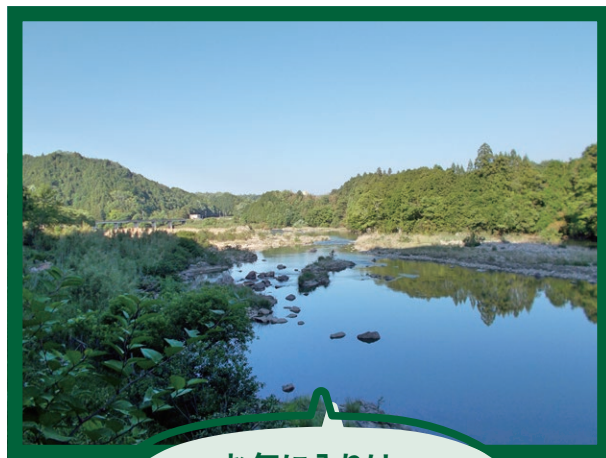
交流のある伊賀市の農業法人で働いている男性と出会い、2017年に結婚。お二人は週末婚というスタイルを選び、それぞれの土地で有機農業を続けています。

「奈良や京都に近く趣味の神社仏閣めぐりが日帰りできるところです。時間を見つけては、奈良・平安時代から続いている神社仏閣に、車や電車で足を運んでいます」



神社仏閣へ訪れた際には、必ず御朱印をいただくのだとか。

私のピカイチ



お気に入り、近所を流れる名張川の景色。桜が植えられた川沿いは、春になると見事な眺めに。

どんな移住支援があるの？

農業次世代人材投資資金など

三重県では、U・Iターンによる新規就農者の受け入れ体制づくりに積極的に取り組んでいます。就業相談窓口や農林漁業就業・就職フェアなどでの就農相談をはじめ、三重県農林水産支援センターでは、「農林漁業研修事業」を実施。長期研修の場合は住宅手当を一部助成しています。また、施設・機械などの整備補助、「農業次世代人材投資資金」の交付(経営開始型、最長5年間、年間最大150万円)などの就農支援の他、サポートリーダーの下での技術習得に向けた実践的研修及び農地や住居の確保、地域への溶け込み支援が受けられる『みえの就農サポートリーダー制度』も用意しています。



▶ 三重県「ええとこやんか三重」

「田舎で暮らそう」というひと言で

小坂田達さん(39歳)・徳島県神山町



徳島中央森林組合所属。愛知県岡崎市生まれ。地元百貨店で食料品の販売を経験したのち、2016年に神山町へ移住。1年間の林業研修を経て、現在現場の最前線で活躍中。

山の中で出合った天職

徳島市街からのびる幹線道路を、車で西へ走ること約40分。山あいに入るにつれて細くなる道を進んだ先に、神山町があります。小坂田達さんの所属する徳島中央森林組合は、町のほぼ中心にあります。

小坂田さんが神山町に移住したのは4年前。それまでは、林業とは無縁の生活を送っていましたが、今では「自分にとって天職」と言えるほど充実しているといいます。「自然の中で体を動かせるのが本当に気持ちいい。体力に自信はないんですが、毎日が楽しくてこんなに自分に合う職業があったのか！と驚いてます」と小坂田さん。



とくしま林業アカデミーの研修生は、林業の現場研修を1年間にわたって、無料で受講できる。

小坂田さんと林業の出合いは、とくしま林業アカデミー。神山町内で働ける仕事を探す中で、「こんなのあるよ」と誘いを受けたのが第1期生の募集でした。話を聞くうちに興味が湧き、「まずは行ってみよう」と受講。「結果的に、技術面だけでなく、同期や県職員、町民とのつながりができ、安心して働ける基盤になりました。今も続けられているのは、この研修があったからですね」



チェーンソーの使い方も慣れたもの。

自然な流れで、 祖父母のいる神山町へ

そもそも移住のきっかけになったのは、奥さんである美香さんの「田舎で暮らそう」のひと言。

「僕はそこまで積極的ではなかったんですが、妻が田舎好きで。都会が好きでもなかったの、じゃあ移住しようかと」。そこで頭に浮かんだのが、小坂田さんの祖父母が住む神山町でした。毎年遊びに行くほどなじみの土地であり、住民との関係性も作りやすくだろう、と移住を決意。周囲の大きな反対もなく自然な流れで話は進んだそうです。

現在、小坂田さん一家は、町の中心地から20分ほど奥へ進んだ山の中の集落に住んでいます。

「祖父母の家に近い家を地元のNPO 法人が紹介してくれました。地方の家が見つかるかどうかはタイミングが重要なので、このご縁はありがたかったです」と小坂田さん。近隣は数軒の空き家のみ。静かな環境の中、お茶やすだちの収穫など祖父母の季節仕事も手伝います。

近くにスーパーもあり、何よりネット環境が整っているので暮らしは快適。町内に高校もあるので、教育面での不安もないそうです。

「移住してから子どもが生まれ、祖父母にひ孫を見せてあげられました」と小坂田さんはうれしそうに笑います。



美香さんと祈穂(きほ)ちゃん。奥さんは町の集落支援員として、高齢者のサポートを行っている。



すだちやお茶の収穫を手伝うなど、四季折々の暮らしを楽しんでいる。

人間関係を何より大切にする

地方は人間関係が重要と話す小坂田さん。「僕たち一家は、あそこのお孫さん、と受け入れてもらいやすかったですが、田舎特有の狭い関係性。いろいろあります」

そこで大切にしているのが、消防団などの地域との接点。地元の方々とコミュニケーションがとれる機会は、それだけで貴重だといいます。

「どんなに山奥だって、ひとりで住めるわけじゃない。面倒臭いこともあります。人のつながりに支えられて今の僕たちがいます。そんな関係性を感謝しながら大切にしたいし、それがうまくいく移住の秘訣かもしれません」

私のピカイチ



徳島県民にとっての
一大イベント「阿波おどり」。
気合いの入り方が違います。

どんな移住支援があるの？

とくしま林業アカデミー

徳島県内で約1万3,000ヘクタールを超える森林を経営する(公社)徳島森林づくり推進機構が運営。林業技術を身に付けた「山の仕事師」を未来につなぐため、徳島県の肝いりで「とくしま林業アカデミー」を2016年に開講。

現在、第4期生15名が現場力重視のカリキュラム(1年間)によって山仕事の基礎を学んでおり、林業を志す若者や自然を愛する移住者に人気です。これまで、3期37名の卒業生全員が県内の森林組合や林業会社に就職したのは、卒業前の濃密なインターンシップ研修と無料職業紹介の結果。こうした就職支援と合わせて、アフターアカデミーという相談サービスも行っており、技術面だけでなく、地域コミュニティの悩みまで幅広くフォローしています。



▶ とくしま林業アカデミー

大好きな釣りを仕事にするために

永倉和久さん(32歳)・大分県大分市



大分県漁業協同組合佐賀関支店、一本釣り漁師。疾風丸船長。大阪府八尾市で生まれ、兵庫県神戸市で育つ。2014年に佐賀関地区へ漁業研修生として移住。2015年に漁師として独立。

母のひと言をきっかけに漁業の道へ

大分県の佐賀関。この豊予海峡で、大分県漁業協同組合佐賀関支店の組合員の漁師が一本釣りしたマアジ、マサバだけが、ブランド魚「関あじ」「関さば」を名乗ることができます。

兵庫県出身の永倉和久さんも、こうした一本釣り漁師のひとり。しかし、漁師になる前は、釣り具メーカーに約7年間勤めていたそうです。

「魚釣りが趣味だった父の影響で、子どものころから釣りが好きでした。それもあって水産系の専門学校で学び、釣り具メーカーに就職しました」

平日は会社で仕事、休日には趣味の魚釣り、という生活をしばらく続けていましたが、釣り道具を売るより、魚を釣るほうがおもしろいことに気づき、それを仕事にするにはどうしたらよいのか考え始めます。そんな永倉さんの背中を押したのが、母からのひと言でした。



佐賀関漁港。大分県と愛媛県との間にある豊予海峡は、「速吸の瀬戸」と呼ばれる急流で、好漁場として知られる。

「母が地方へ移住した人を紹介するテレビ番組の録画を見せながら、『魚釣りが好きなら道具を売るより、釣る仕事をしてみたら？ そのほうが合ってるちゃう？』と言ったんです」

その言葉をきっかけに、釣りを仕事にする方法を真剣に調べ始めた永倉さんは、大阪での漁業就業支援フェアに参加。そこで一本釣り漁業に出会います。

「佐賀県では一本釣り漁業という、釣り専業で独立できることが分かりました。そこで、大分県漁業協同組合佐賀関支店の1ターン研修制度に応募したのです。複数の応募者の中から幸運にも自分を選んでいただき、2014年度の研修生として、佐賀関に移住しました」

同年9月から1年間の研修がスタート。ベテラン漁師1名の下に付き、一本釣りのやり方などを学びます。しかし、漁船を操縦しながら一本釣りをするには、想像以上に難しかったそうです。

「たった1年で独り立ちできるのかと、不安に感じたこともありましたが、私は楽観的な性格でして、『なんとかなるやろ』とも思っていました。ただ、独立すると、漁船購入代、燃油代、道具代などをすべて自分で支払わなければなりません。研修が終盤になると、こうした費用を工面できるかが心配になってきました。幸いこのころに、大分市が漁船購入の支援事業を開始したため、補助を受けることができました」

こうして一本釣り漁師として独立した永倉さんは、疾風丸船長として、関あじ、関さばはもちろん、タチウオ、ブリ、マダイ、イサキの漁で生計を立てています。



金色味を帯びている「関あじ」(左)、大きな「関さば」(右)は刺身料理がおすすめ。商標登録されており、タグシール付きで出荷される。
写真提供／大分県漁業協同組合佐賀関支店



研修期間中の永倉さん。船のメンテナンスをしているところ。
写真提供／大分県漁業協同組合佐賀関支店



逆風でも船が安定して進むように、スパンカーで船の向きを調整する。

温泉めぐりを楽しみ、 止めていた趣味も再開

2016年には、大分県出身の奥さんと結婚。息子さんも生まれ、現在は家族3人で充実した生活を送っています。

「移住当初は方言が分からなくて、コミュニケーションをとるのが大変でしたが、やさしくて親しみやすい方が多く、近所の方からもかわいがってもらっています。例えば独身のころは、ビールや夕食のおかずを差し入れしてくださったり、ゴミ当番を免除してくださったり。近所付き合いがしんどいと思ったことはないですね。借りている一軒家の大家さんも気さくに声を掛けてくれて、一緒にお酒を飲みに行くほど仲良くさせてもらっています」

漁師生活が軌道にのってきたところで、趣味の釣りも再開しました。

「時間と心の余裕ができたので、趣味のバス釣りも楽しめています。新たに県内の温泉めぐりも趣味になりました。平日に休めることも多いので、観光客の少ない温泉に、妻と子どもを連れて行くこともできて満足してます」

これから移住を考えている人は、「挑戦してみたらと思う」と永倉さん。「私はあまり後先考えずに、ノリと勢いで引っ越しました。たった1回しかない人生。興味あること、おもしろそうなことに足を踏み入れたほうが、自分の人生が豊かになると思います」



長男の武くんは昨年生まれただけ。子どもと過ごす時間が何より大切という。

私のピカイチ



兵庫にいたころから
続けていたバス釣りを
大分でも楽しんでいます。

どんな移住支援があるの？

一本釣り漁師の就業支援

国の漁業人材育成総合支援事業「長期研修支援事業」の一環として、大分県漁業協同組合佐賀関支店では「新規就業者支援」を行っており、毎年1名程度の研修生を受け入れています。

研修期間は1年で、研修生1名に対し指導者1名がつき、一本釣りの技術などを学びます。研修開始前に小型船舶免許取得、研修期間中に准組合員への申し込み、漁船の購入(市・県の支援あり)が必要で、大分市は漁船の取得を補助する「大分市漁業新規就業者育成支援事業」、大分県は「大分県青年就業給付金事業」を実施。研修開始から1年半は、大分市市営住宅に入居可能です。なお、研修後は独立して一本釣り漁師となるため、開業のための自己資金が必要となります。



▶ 大分県漁業協同組合 佐賀関支店

まずは体験から始めてみよう

農業をやってみたい、地方移住を検討したいけど、即行動するのは不安かもしれません。そんなときは、気軽に参加できる体験先や相談窓口がたくさんあります。まず、試してみたいはいかがでしょうか。

農業や移住体験に参加してみよう

農業や地方移住に興味があっても、分からないことが多いと感じる人もいるでしょう。そんなときは、気軽な気持ちで農業体験イベントへの参加や、気になる地域への短期間の移住を試してみませんか。

農業体験イベントは全国各地で行われており、子どもと参加できる企画も数多くあります。例えば、埼玉県さいたま市のボランティア団体「畑こども食堂」では、同県の協力のもと、市民の森・見沼グリーンセンターを拠点に2019年4月から毎月1回、親子で農業体験ができるイベントを開催しています。イベントでは、子ども同士や親同士、近隣住民とコミュニケーションをとりながら、種まきや水やり、間引きといった畑作業を体験。その後に、採れたての新鮮な収穫物を参加者で食する「ごはんタイム」も用意されています。時間に余裕がある場合は、グリーンセンターの料理実習室を使った、調理体験にも参加できます。

また、移住を検討したい地域が見つかったときにおすすめなのが、実際に生活を体験してみる“お試し移住”。体験専用の住宅や、生活が体験できる宿泊施設を用意している市町村は数多くあります。これらは条件を満たせば無料、あるいは比較的安い料金で利用できるのが魅力です。こうした仕組みを使って、短期間でも実際に過ごしてみると、移住後の暮らしを具体的にイメージしやすくなることでしょう。



▶ 畑こども食堂



大人と子どもが集まって畑での作業を体験できる。



福井県美浜町にある移住居住体験施設「黄舎」。同町で新規就農を目指す人をはじめ、暮らしを体験したい人向けに整備。

農業体験ができるところ

▶ 農感塾／農協観光 グリーンツーリズム北海道(北海道)

季節の農作物の収穫体験や、酪農体験などを楽しめる道内の旅行企画。日帰りや1泊2日のバスツアーでさまざまな体験ができる。



▶ あぐりスクール／JA上伊那(長野県)

小学3年生から6年生を対象に、毎年開催している農業体験教室。食とそれを育む農業や、自然に親しんでもらえるよう多くのカリキュラムを用意。同JA管内を対象。通年参加型。年9回。



▶ FIO／ユギムラ牧場(東京都)

年間を通じて、田植え、稲刈り体験などさまざまなイベントを開催。ハチミツの収穫時期には、養蜂イベントも実施。



▶ 箕面市農業公社(大阪府)

市内の中学校の給食で使われる野菜畑で、公社職員と一緒に農作業を行う。種まきから収穫、出荷の準備まで、本格的な体験ができる。



▶ 食育体験ファーム ほっこり農園(福岡県)

年間を通してさまざまな企画を用意。田植えや稲刈りをはじめ、アスパラガス、枝豆、大豆などの収穫、しいたけ菌打・収穫も体験できる。



移住体験ができる主な自治体

▶ 北海道・南幌町

原則2カ月(7月から8月は1カ月)以内で3DK住宅の使用料が1カ月当たり1万1,500円(光熱費などは別)。町内公共施設を町民料金で利用可能。



▶ 宮城県・登米市

期間は2泊から9泊。5K住宅が無料で利用可能。滞在期間中に移住定住相談会に参加することが条件。



▶ 山梨県・甲州市

期間は2泊から6泊。お試し移住用住宅は2カ所にあり、合わせて年4回まで無料で利用可能。事前アンケート、滞在計画及び参加報告書などの提出が必要。



▶ 福井県・美浜町

市民農園に隣接した移住居住体験施設「黄舎」を1泊5,000円から利用可能。



▶ 三重県・紀宝町

期間は1泊から6泊。高岡地区のお試し住宅を無料で利用可能。



▶ 山口県・下関市

期間は1泊から4泊で、滞在施設は無料で利用可能。唐戸エリアの「まちなか暮らし」と豊田町の「いなか暮らし」から選べる。移住相談及び体験プログラムへの参加が必要。



▶ 福岡県・大牟田市

期間は2泊から13泊。年2回まで無料で利用可能。参加者に女性を含むことが条件。また、事前アンケート、事後アンケートへの協力が必要。滞在期間中に参加者ごとの要望に応じた市内半日ツアー(無料)を実施。



移住の相談はまずここから

地方移住を考えている際に頼りになる、全国各地の情報を集めた移住相談窓口やポータルサイトを紹介します。

ふるさと回帰支援センター

45道府県と連携している認定NPO法人ふるさと回帰支援センターでは、東京と大阪に移住相談の窓口を設置。北海道から沖縄までの移住に関するパンフレットや資料が充実しており、持ち帰りも可能です。移住に関するセミナーも昨年は539回も開催。昨年の移住相談件数は4万1,752件。毎年秋には、全国の自治体に参加する「ふるさと回帰フェア」も主催し、参加者は例年2万人を超えています。



▶ ふるさと回帰支援センター



39道府県の移住相談員との相談の予約を常時受け付けている。

移住・交流情報ガーデン

総務省が、地方移住に関する情報提供や相談支援の一元的な窓口として開設した「移住・交流情報ガーデン」。地方移住に関する一般的な相談に対応している他、地方での就農や就職などの相談には専門の相談員が対応しています。また、移住に関するセミナーや移住相談会が随時開催されています。



▶ 移住・交流情報ガーデン



東京駅(八重洲中央口)から徒歩4分のところにある。

ニッポン移住・交流ナビ

(一社)移住・交流推進機構(JOIN)が提供する、移住のヒントになる情報を毎月掲載しているポータルサイトです。各地で行われる移住体験プログラムやツアーなどの情報だけでなく、自治体からの求人情報や空き家情報も探すことができます。同機構では全国約500の団体が出展する「移住・交流&地域おこしフェア」も毎年開催しており、本年度は2020年1月26日(日)に開催予定です。



▶ ニッポン移住・交流ナビ



JOINではニッポン移住・交流ナビの他、地域おこし協力隊に関する募集情報などを発信するページも運営している。(左)ニッポン移住・交流ナビ、(右)地域おこし協力隊ポータルサイト。



▶ 地域おこし隊ポータルサイト

「自然の中で働きたい」そんなあなたにあふてらすー農林漁業はじめるサイトー

田舎暮らしに興味があるけれど、どんな仕事があるかわからないという皆さんのために、農林水産省は新しいサイトを作成しました。農業・林業・漁業、その加工・販売を始めたい方に役立つ情報への入り口が1カ所にまとまっています。

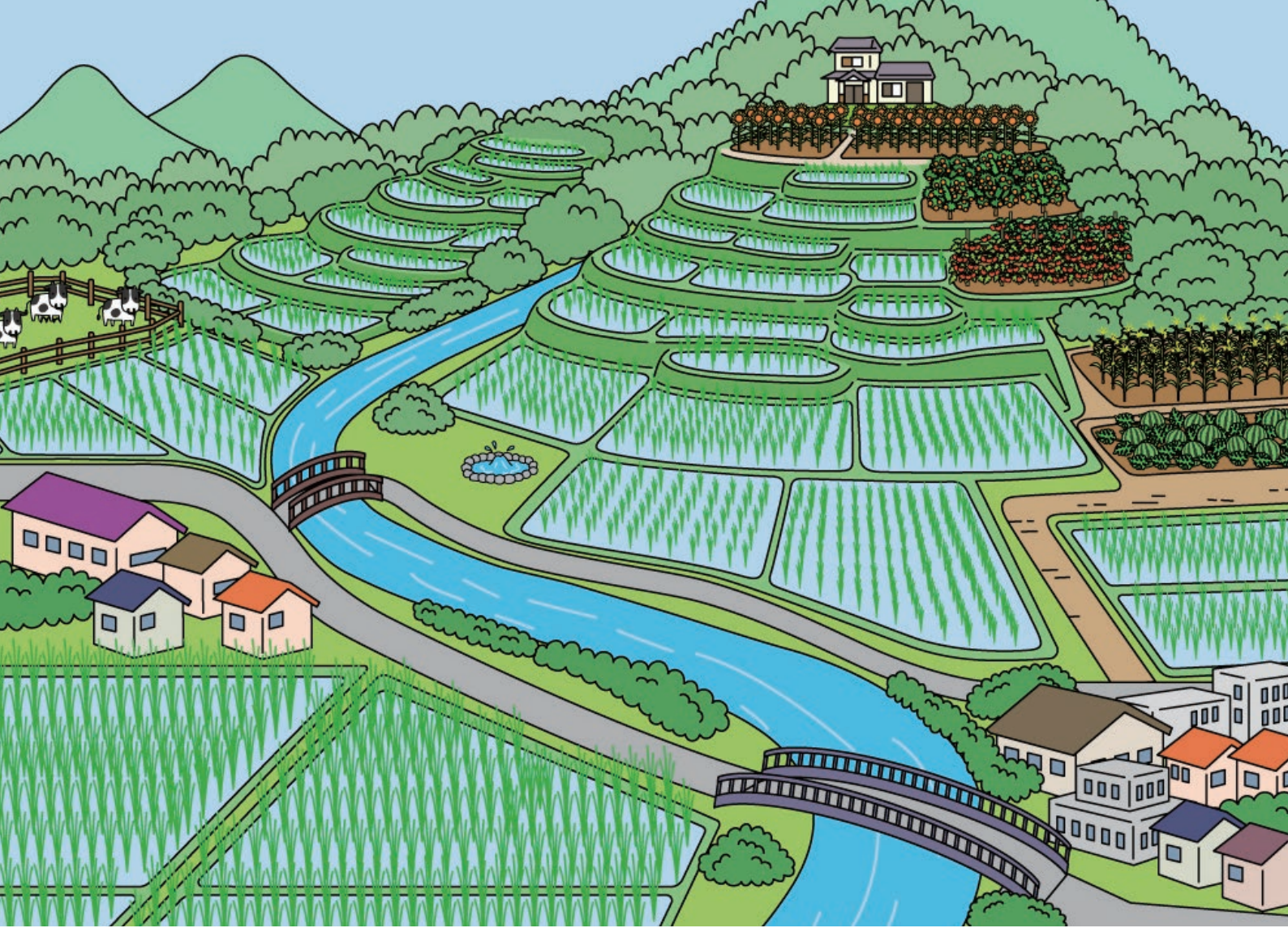
新しい時代の幕開けに、新たな世界へ一歩、踏み出してみませんか。



▶ あふてらす

「あふてらす」は、農業・林業・漁業、その加工・販売に興味がある方、これからはじめたい方向けの情報を発信しています。





農業のめぐみ

田畑は作物をつくるだけじゃない

水田や畑は、私たちが食べる米や野菜が作られる大切な場所です。私たちが生活をする上で、大変重要な多くの「めぐみ」をもたらしてくれます。この「めぐみ」を「農業・農村の有する多面的機能」と呼んでいます。

日本では、年の平均気温が100年当たり1.21度の割合で上昇。また、猛烈な雨(1時間の雨量が80ミリメートル以上の雨)が発生する回数も増加しています。

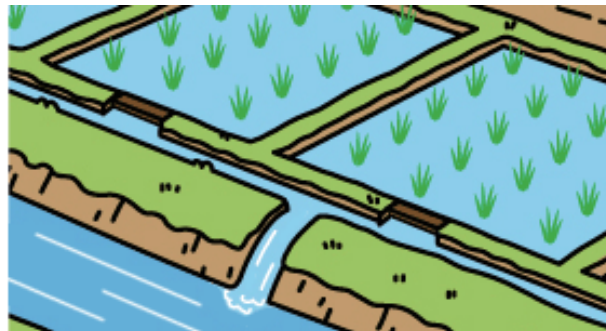
例えば、このような気候変動や頻発する豪雨などの気象災害に対しても、その影響を軽減するような役割を持っています。

では、主な「めぐみ」を見てみましょう。

洪水を防いでくれる

水田は、周りをあぜで囲まれており、雨水を一時的に貯留することができます。

また、耕作されている畑では、土の粒子が集まって団粒構造を作り、その小さなすき間に水を蓄えることが可能です。そのため、大雨になっても一気に川に流れ込むことなく、洪水の危険を減らしてくれます。このめぐみは、田畑での農作業を継続することにより得られます。



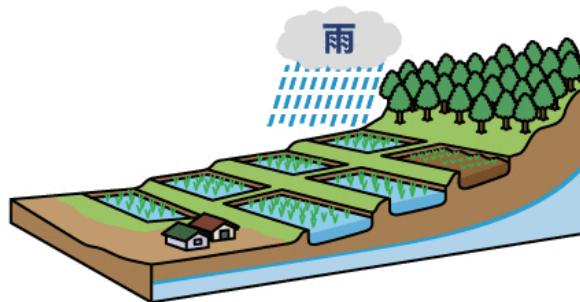
あぜに囲まれている水田は、大雨の際、雨水を一時的に貯留し、時間をかけてゆっくりと下流へ流すことができる。

土砂崩れを防いでくれる

傾斜地に作られた田畑は、生産活動を通じた日々の手入れによって、土砂崩れが起きるのを未然に防いでくれます。さらに、耕作された水田では、水がゆっくりとしみ込むため、雨水による急激な地下水位の上昇を抑える働きにより、地すべりを防ぐ役割も。

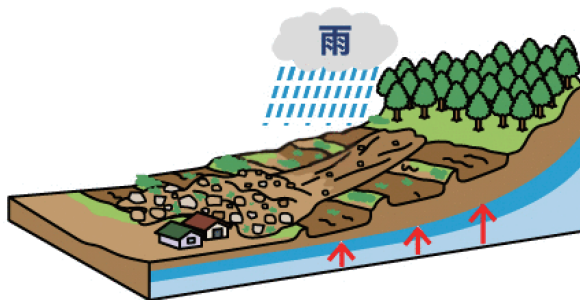
また、水田に張られた水や田畑の作物は、雨や風から土壌を守り、下流域への土壌の流出を防ぎます。

耕作が続けられていると...



雨水は田畑に貯留され、地下水が急激に増えないため、土砂崩れなどが起きにくい。

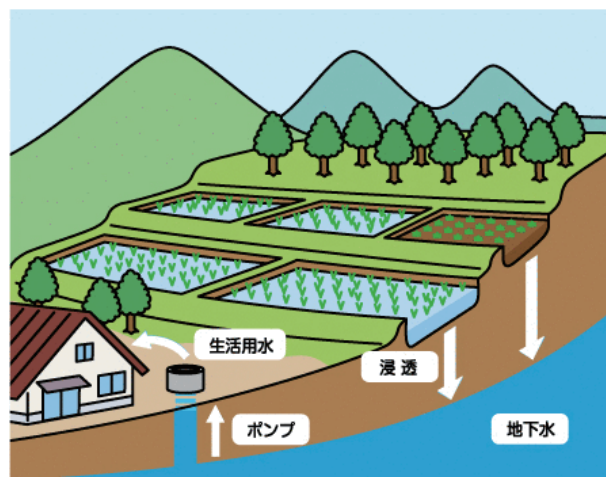
長い間、耕作が放棄されると...



雨水が貯留されず、地下水が急激に増えて、土砂崩れなどが起きやすくなる。

地下水をつくってくれる

水田に溜められた水は、ゆっくりと浸透して地下水になり、下流地域で生活用水や工業用水として活用されます。また、長い時間を掛けて下流の河川に戻り、川の流れを安定させる働きも。耕作された畑からも同じようなめぐみが得られます。



田畑に溜められた雨水などの多くは、地下水となり、良質な水として下流地域の生活用水などに活用される。

美しい景観をつくってくれる

農村地域では、農業が継続的に営まれることによって、田畑に育った作物や農家の家屋、その周辺の水辺や里山が一体となって美しい田園風景を形成しています。

こうした美しい景観は、四季折々に変化し、澄んだ空気やきれいな水などとともに、人々に癒しやすさを与えてくれます。

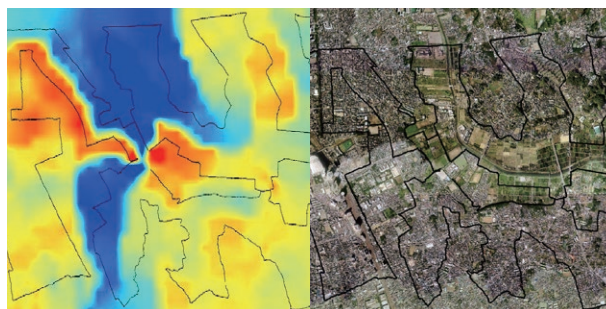


日本の棚田百選にも選ばれた、国内最大級の棚田「丸山千枚田」。
写真提供／(公社)三重県観光連盟

暑さを和らげてくれる

都市部では、周辺の郊外に比べて気温が高くなるヒートアイランド現象が顕著になってきています。東京の100年当たりの平均気温上昇は3.2度で、日本の平均気温上昇を2倍以上、上回っています。

水田には、水面からの水分の蒸発や、作物の蒸散により空気を冷やす効果があります。この冷涼な空気が周辺の市街地の気温上昇を抑えてくれます。



さいたま新都心に近接する見沼田んぼ付近で、水田は市街地に比べ、1.32度低く、周囲より気温の低いクールスポットが形成されていた。
出典：埼玉県環境科学国際センター「埼玉県ヒートアイランド現象対策事業調査報告書」(2009年)

その他のめぐみ

農業・農村の有する多面的機能には、その他にもさまざまな働きがあります。

全国各地には五穀豊穡(ごこくほうじょう)祈願や収穫を祝うものなど、稲作をはじめとする農業に由来する伝統行事や祭りが多く、地域において永きにわたり受け継がれています。

また、体験学習や教育の場としての働きも。農村で、動植物や豊かな自然に触れることで、生命の大切さや食料のめぐみに感謝する心を育むことができます。

これまでに紹介したさまざまな働きは、どれもかけがえない大切なものです。このような価値はお金に換えがたいものですが、一部の機能は貨幣評価も行われていて、足し合わせると年間8兆円以上になるという試算結果もあります。

今回紹介したもの以外の働きについては、下記をご覧ください。



▶ 農業・農村の有する多面的機能

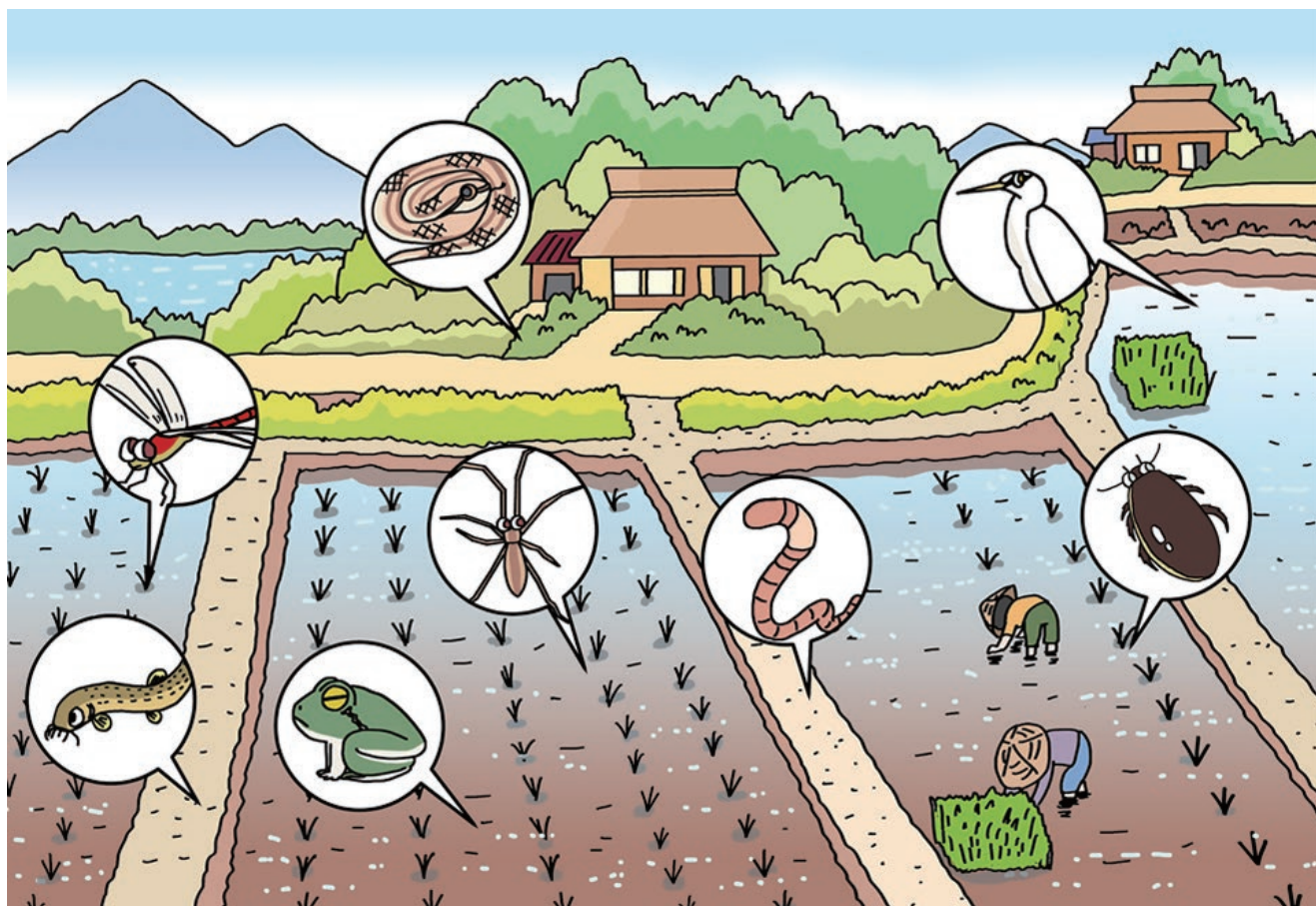


「壬生(みぶ)の花田植」は、2011年にユネスコの無形文化遺産にも登録された広島県北広島町で行われる稲作儀礼。
写真提供／(一社)北広島町観光協会



水田の用水路で生き物調査をしている様子。

生き物を育む田畑のめぐみ

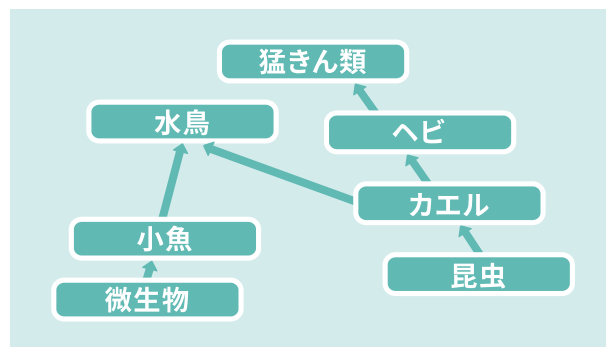


多くの生き物が つながりあって生きている

水田や畑で農業生産が継続的に行われることで、豊かな生態系が保たれ、多様な生物が生息しています。

生物多様性とは、生き物たちの豊かな個性とつながりのことです。例えば、水が張られた水田には、クモや昆虫が繁殖します。そのクモや昆虫をカエルが食べ、そのカエルをヘビが食べ、そのヘビを猛きん類が食べます。このような「食物連鎖」によって、多くの生物が集まり、つながりあって生きているのです。

田の食物連鎖



生き物を育てる

水田や畑は多くの生き物のすみかになっています。どんな生き物がいるのか、覗いてみましょう。

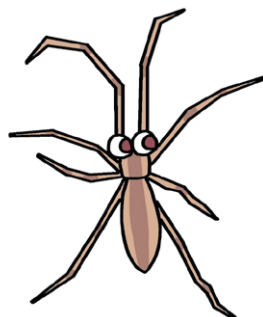
アマガエル

両生類。体長は20ミリメートルから45ミリメートルほど。水田に生息する代表的な生物で、水田は繁殖場でもありえさ場でもある。肉食性で昆虫類やクモを食べる。皮膚はつるつるとした粘膜に覆われているが、これには毒があるので、触ったら必ず手洗いをしよう。



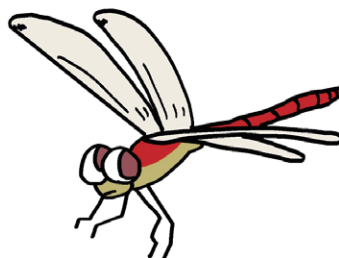
クモ

節足動物。水田や水辺に生息し、稲の害虫を食べるクモは、キクヅキコモリグモ、ハシリグモ、ハエトリグモなど。コモリグモ科のクモは地上を歩き回って虫を捕らえるものが多い。



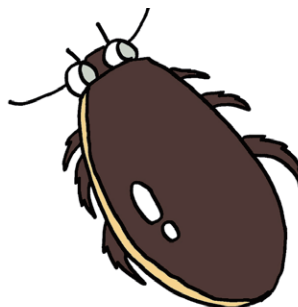
トンボ

水田には、赤とんぼが属するアカネ属などのトンボが多種生息している。ハエやカ、稲の害虫のウンカなどを食べる。空を飛びながら虫を見つけるとサッと飛びつき、脚をカゴ状にして捕まえて食べる。



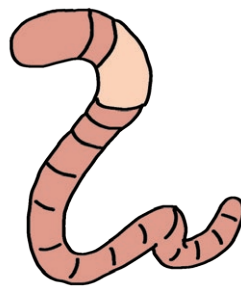
ゲンゴロウ

水生昆虫。成虫の体長は30ミリメートルから40ミリメートルほど。泳ぎが得意で、水田や用水路に生息し、脚の鋭い爪で獲物を捕まえる。肉食性だが、死んだ魚やカエル、水面に落ちた昆虫などを食べることが多い。



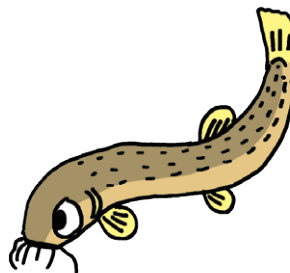
ミミズ

目がなく、手足もない紐状の環形動物。体長は1ミリメートル以下のものから数十センチメートル以上のものまである。通常、畑などの地中に住んでいる。落ち葉などと一緒に大量の微生物を飲み込み、それを排泄することで栄養が豊富な腐植土のもとをつくってくれる。



ドジョウ

水田や湿地など、日本に広く生息している淡水魚の一種。他の生物の食べ残しや水草を食べ、水質を良くしてくれる。卵や稚魚がゲンゴロウやトンボの幼虫・ヤゴなどの昆虫の食料になる。



サギ

水田などでよく見掛ける白いサギには、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギがいる。湖でも見掛けるが、水田ではオタマジャクシを捕獲して食べることが多い。



シマヘビ

日本に広く生息しているヘビ。肉食性で、水田や畑に生息しているカエルやネズミなどを食べる。無毒だが、歯は鋭くかむことがあるので注意が必要。



ギネス
世界記録™

挑戦者たち

vol.2

世界最大の田んぼアート

田んぼアート米づくり体験事業推進協議会／埼玉県行田市



2015年にギネス世界記録に認定された田んぼアート。「未来へつなぐ古の軌跡」と題し、行田市指定天然記念物の古代蓮や、はやぶさ2、子どもたちを描いた。

ギネス世界記録に3年続けて挑戦

埼玉県北部に位置する行田市は、県内有数のお米の生産地です。「彩(さい)のかがやき」をはじめとするお米のPRや、農業体験を通じた市民の交流などを目的に、水田に複数の色の違う稲を植えて絵を描き出す「田んぼアート」を行っています。毎年6月には、約2万8,000平方メートルの水田にのべ1,000名ほどの市内外のボランティアが集まり、公募などで決まったデザインに基づき、苗を植えていきます。

「やるからには世界一を目指そうと、ギネスワールドレコーズの本社にかけあい、2011年に田んぼアートのカテゴリーをつくってもらいました」(行田市農政課課長・村田清治さん)



2017年制作の「イナダヒメノミコトとスサノオノミコト」。

「2種以上の稲を使い、面積1万5,000平方メートル以上の水田に、全体の60パーセント以上を使って絵を描き出す」というギネスワールドレコーズの基準を満たし、記録に初挑戦できたのは2013年です。しかしこのときは、黄色の色彩用に使った稲の一部に生育不良が発生し、「アートとして未完成」と、認定には至りませんでした。

翌年は大雨による田植えの遅れがあって、断念。そして2015年、芸術性の高さを追求できる稲の選定や、水田の整備などを行い、再チャレンジ。田植えには、のべ800名以上のボランティアが参加してくれました。

「田植え後の大雨により苗が浸水に見舞われるなど、予測不能な自然を相手にはらはりましたが、ついに完成。そして、『世界最大の田んぼアート 記録2万7,195平方メートル』に認定されたんです」



市内外からのボランティアを募り、毎年6月に田植えを、10月に稲刈りを行っている。後ろに見えるのが2001年に開館した「古代蓮の里」の展望室で、池の水面から蓮の花茎が立ち上がる様子をイメージしてつくられた。



田んぼアートには「彩のかがやき」(緑色)、「べにあそび」(赤色)などさまざまな品種が使われる。

芸術性の高い田んぼアートを

ギネス世界記録に認定されたことで、田んぼアートを上から見られる「古代蓮の里」の展望室は、年間10万人が訪れる観光スポットになりました。年々、田んぼアートにふさわしい稲の研究が進み、より鮮やかな色彩で絵を描き出せるようになってきています。田植えや稲刈りには、大勢のボランティアが参加するなど、体験を通じた農業や環境への理解も進んでいます。しかし、目指すゴールは、まだ先にあります。



ギネス世界記録が認定された2015年9月8日には、推進協議会メンバーなどが集まり認定を祝った。

「田んぼアートは日本全国で100カ所くらい行われています。中には稲で描いたとは思えないほど精緻(せいち)で美しい作品もつくられ、年間30万人が見学に訪れるところもあります。これからも皆さんの協力を得ながら、美しさも追求して、さらに多くの人に見に来ていただけるようになりたいですね」

2019年のデザインは、東会場が「ラグビー日本代表応援田んぼアート」、南会場が「新元号『令和』」の文字を描くとのこと。今年も彩り鮮やかなアートが期待されます。



2019年は、ラグビー日本代表を応援する田んぼアートを大正製薬の全面協力により制作する予定(画像はイメージ)。



お話を伺ったのは、田んぼアートを試行した立ち上げメンバーのひとり、行田市農政課課長・村田清治さん。

読者の声

読者の皆さまから寄せられた『aff(あふ)』4月号へのご意見・ご感想を紹介します。

特集を読み、平成の間にいろいろなことがあったんだとあらためて思いました。私も今は無洗米を使っています。子どもがひとり暮らしを始めて自炊することもあり、便利で手軽なものが増えたのはありがたいことです。『aff』がリニューアルするそうなので、忘れないようにチェックしなくては！(50代・女性)

昔はイチゴに練乳をかけて食べるのが普通でしたが、今は甘くて、大きく、形も綺麗な品種がたくさん出ており、そのまま食べるのが普通になっています。これも品種改良などの技術が大きく発展してきたからだと思っています。農業人口は減っているのに、生産農業所得が上がってきていることもすごい発展だと思います。新しい時代は農業が儲かる産業になるよう、消費者として自分自身ももっと考えていきたいと思っています。(30代・男性)

『aff』は毎号、バラエティに富んだテーマが選ばれていて、583号も発行されていることはとても素晴らしいと思います。私にとって、初めて知る内容が多く、興味深く楽しく読ませていただきました。これからはデジタル化されますが、ずっと長く発行が続くことを願っています。(60代以上・女性)

「平成の足跡」に興味深く読みました。日本の生産品の歩みや食の変化など、自分の人生と照らし合わせてしまいました。これからの日本はどうなるのだろう？という思いをはせたり。繰り返し読もうと思いました。(50代・女性)

最近ファストフィッシュをよく利用するので、「『平成』の足跡」がとても興味深い内容でした。また、「MAFF TOPICS」で「SDGs」を初めて知りましたが、良い理念を持った取組指針だと感じました。自分でも調べてみたいと思います。(20代・女性)

「affの歩み」を懐かしく拝見しました。約11年間の歩みが頭をよぎります。この期間、農林水産業や食生活も著しく変化しました。農林水産業をとりまく環境も想像を絶するものがあります。もちろん、将来への不安も少なくありませんが……。 (60代以上・男性)

「私のおもいで弁当」シリーズは毎回、いちばん楽しみにしていた連載です。私も高校生の時は海苔弁当が大好きで、親はあきれていましたが、毎日必ず2段重ねの海苔弁当を作ってもらい、昼休みが待ち遠しかったことを思い出しました。ついに『aff』もデジタル化するんですね。デザインも大きく変わるとのことで、楽しみにしています。(40代・男性)



広報誌
aff(あふ)の感想を
お聞かせください



編集・発行

農林水産省
大臣官房広報評価課広報室

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
TEL:03-3502-8111(代表)
FAX:03-3502-8766

編集協力

株式会社
角川アスキー総合研究所

〒113-0024 東京都文京区西片1-17-8
TEL:03-5216-8082(アスキー事業部)

編集：西上範生

アートディレクション：石割亜沙子

Web サイト：井口真莉奈

取材・文：下境敏弘、Office 彩蔵、高橋奈己、
長谷川奈緒、千葉智史

撮影：島 誠、長谷川 朗

イラスト：あべかよこ、西上希子